高校教育における学習評価の充実志向
－ｅポートフォリオの導入・活用と多面的評価の推進－

助川晃洋・坂本徳雄

Ⅰ．序

2001年と2010年に指導要録が改訂され、「各教科の学習の記録」欄のⅠ「観点別学習状況」とⅡ「評定」がともに、目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）に基づくことになって以降、教育評価（その中核としての学力評価）研究の成果を参照し、新しいアイディアを取り入れ、試行錯誤を重ねる学校が各地に現れるようになった。その傑出した事例としては、大学の教育方法学研究者とともに、「逆向き設計」（backward design）論に基づくカリキュラム設計や単元モデルの開発、パフォーマンス課題の設定、ルーブリックの作成を行った香川大学教育学部附属高松小学校[1]や京都市立衣笠中学校[2]の試みを挙げることができる。しかし小・中学校の前向きな姿勢に比べると、高等学校はトライすることに及び腰で、旧態依然のまま停滞しており、打開が必要であることが、たびたび指摘されている。

2016年12月21日に出された中央教育審議会の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（＝中教審答申）では、次のように述べられている[3]。

○　（前略）観点別学習状況の評価については、小・中学校と高等学校とでは取組に差があり、高等学校では、知識量のみを問うペーパーテストの結果や、特定の活動の結果などのみに偏重した評価が行われているのではないかとの懸念も示されているところである。義務教育までにバランス良く培われた資質・能力を、高等学校教育を通じて更に発展・向上させることができるよう、高等学校教育において

も、指導要録の様式の改善などを通じて評価の観点を明確にし、観点別学習状況の評価を更に普及させていく必要がある。

○　また、資質・能力のバランスのとれた学習評価を行っていくためには、指導と評価の一体化を図る中で、論述やレポートの作成、発表、グループでの話合い、作品の制作等といった多様な活動に取り組ませるパフォーマンス評価などを取り入れ、ペーパーテストの結果にとどまらない、多面的・多角的な評価を行っていくことが必要である。さらには、総括的な評価のみならず、一人一人の学びの多様性に応じて、学習の過程における形成的な評価を行い、子供たちの資質・能力がどのように伸びているかを、例えば、日々の記録やポートフォリオなどを通じて、子供たち自身が把握できるようにしていくことも考えられる。

また中教審答申では、次のように述べられている[(4)]。

○　高等学校においては、生徒一人一人の進路に応じた多様な可能性を伸ばしていくという視点から、多様な活動の機会を通じて、それぞれの生徒に成長のきっかけを与えるとともに、多様な学習活動における学習の成果を的確に見取り、生徒一人一人に対応した指導の改善につなげていく取組が重要となる。

○　例えば、（中略）「総合的な探究の時間」や「理数探究」など、探究の過程を重視した学習について、その学びの過程を含めた評価を行うなど、多様な学習活動に対応した評価の在り方等を開発・普及していくことが必要である。

○　また、評定や観点別学習状況の評価といった目標に準拠した評価だけではなく、生徒一人一人のよい点や可能性に着目する個人内評価についても併せて充実を図る必要がある。

○　高大接続改革においては、こうした多様な評価を活用して、高等学校における学びと大学教育をつないでいく議論がなされており、大学入学者選抜改革の観点からも、こう

した多面的な評価の充実が求められる。

「多面的な評価の推進」は、2017年７月13日に策定された「高大接続改革の実施方針等」の「（参考）高大接続改革の進捗状況について」において、「高等学校教育改革」の柱の一つに据えられている[5]。2018年３月30日に告示された高等学校学習指導要領では、多面的（な）評価という言葉こそ見られないものの、実質的に、同じ方向性が共有されているとみなして差し支えない。すなわち今後の我が国の高校教育では、多面的評価の実施を軸として、「学習評価の充実」が、より一層図られることになる（p.18.）[6]。

しかしながら、現場の物事は、行政サイドが思い描き、求める通りには、すんなりとは進まないものと予想される。現状を見れば、多面的評価の目的、課題、方法、意義、そして実践上の留意点などについての教師の理解は、決して十分とは言えず、それに取り組んでいる学校も、まだまだ少数だからである。そして本稿は、こうした状況を踏まえて、その克服に資することを意図したものであり、2018年度の宝仙学園高等学校女子部における教育評価改革の動向について報告することを課題としている。行論に即して言えば、まずはｅポートフォリオ（電子学習記録システム）、それもJAPAN e-Portfolio（JePと略記されることがある。本稿では、ⅡとⅢの見出しで、これを用いた）の導入に向けて、１学期と夏季休業期間中に同校内外・教員間で行われた主な取り組みを整理し（Ⅱ）、次に２学期に開催された宝仙祭（幼稚園から大学までが一緒に行う学園祭）に着目して、ｅポートフォリオを活用した多面的評価実践のうち、「主体性等」（後述）に関する生徒の自己評価プロセスを追跡する（Ⅲ）。このような作業を経て、高校教育における学習評価の充実をどのようにして実現するかという問いに対する一つの回答を提示してみたい。

Ⅱ．JeP導入の経緯と学校の対応

１．宝仙学園高等学校女子部では、高大接続改革の要請の高まりに応えるために、とりわけ2020年度に予定されている大学入試改革に備えて、学習評価の方法について、学力の３要素、すな

わち基礎的な知識・技能、思考力・判断力・表現力等の能力、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度（主体性・多様性・協働性）を多面的・総合的に把握するものへと転換すること、とりわけ、通常、主体性等と称される第三の事項に特化した取り組みを充実させることが必要不可欠であるとの共通認識に至った。そして同校では、JAPAN e-Portfolioを導入し、プラットフォームとして位置づけることが有益であるとの考えで一致した。これらはいずれも、2018年度開始直後のことである。

「JAPAN e-Portfolio」とは[7]

「JAPAN e-Portfolio」概要

高大接続ポータルサイト「JAPAN e-Portfolio」とは、文部科学省大学入学者選抜改革推進委託事業（主体性等分野）で構築・運営する、高校ｅポートフォリオ、大学出願ポータルサイトです。高等学校では、生徒の学校内外の活動をｅポートフォリオとして記録し、生徒の振り返りを高校教員が確認できます。

※　平成30年度現在、本サービスは高校１年生、２年生、３年生を対象に提供させていただいております。

※　「JAPAN e-Portfolio」のデータは、「JAPAN e-Portfolio」の利用を表明した大学において、平成30年度（平成31年度入試）より、入学者選抜における評価、参考データ、統計データ等の目的で利用されます。なお、各大学の利用方法は、募集要項等に明記されます。

※　「JAPAN e-Portfolio」を利用する大学は、本サービス上で順次告知します。

※　本事業の委託事業期間は、平成31年3月末までとなり、期間終了後の「JAPAN e-Portfolio」の運営は、大学等による任意団体や財団等において行なうことについて検討、調整を進めております。

「JAPAN e-Portfolio」でできること

○　高校生

自分の活動成果や学びを記録

学校の授業や行事、部活動などでの学びや自身で取得した資格・検定、学校以外の活動成果を記録。活動成果や学びを積み上げていくことでｅポートフォリオとして情報が蓄積されるとともに、将来的にはこのデータを大学入試時に利用できます。

自分の活動成果や学びを振り返る

登録した「学びのデータ」は月ごとにまとめて閲覧が可能です。どんな種類の学びに取り組んでいたかを確認ができ、今後どのような学び・成果につなげていくかの参考として確認が可能です。

蓄積した「学びのデータ」を利用し、出願

高校生活の中で蓄積した「学びのデータ」を個別大学へ連携し、出願時に利用することができます。

※　「JAPAN e-Portfolio」のデータは、「JAPAN e-Portfolio」の利用を表明した大学において、平成30年度（平成31年度入試）より、入学者選抜における評価、参考データ、統計データ等の目的で利用されます。なお、各大学の利用方法は、募集要項等に明記されます。

※　「JAPAN e-Portfolio」を利用する大学は、本サービス上で順次告知します。

※　本事業の委託事業期間は、平成31年3月末までとなり、期間終了後の「JAPAN e-Portfolio」の運営は、大学等による任意団体や財団等において行なうことについて検討、調整を進めております。

※　蓄積した「学びのデータ」は最終ログインから５年間保持します。

○　先生

生徒の皆様の活動成果や学びの状況を確認

「JAPAN e-Portfolio」の先生向けの機能として、生徒一人

ひとりの入力内容を閲覧できます。

生徒の皆様の「主体的な学び」をサポート

面談前や年度末に、生徒とともに内容を確認し、振り返ることで、継続的な「主体的な学び」に向けて、ご指導にお役立てください。

「JAPAN e-Portfolio」の運営団体

○　運営・管理

文部科学省大学入学者選抜改革推進委託事業（主体性等分野）

代表大学：関西学院大学（郵便番号と所在地は省略－引用者注）

○　運営サポート

株式会社ベネッセコーポレーション

２．宝仙学園高等学校女子部では、学年主任会（５月28日、６月11日の第５、７回）や副部長会（４月18日、25日、５月９日、16日、30日、６月６日、13日、20日の第１～８回）、職員会議（５月27日、６月11日、18日、７月２日、14日、19日、８月31日の第１～７回）において、いま、なぜｅポートフォリオなのか、誰が利用でき、どんなことに使えるのか、学校改革グランドデザインの実現につながるのか、生徒が自己評価力や自己決定力を身につけることに役立つのか、その他をめぐって、引き続き活発な議論を行っている。５月28日（リクルートのスタディサプリについての内容を含む）、７月２日、19日、８月31日には、グループワーク形式の教員研修会を開催している。このうち７月以降のものは、「多面的評価（メタ認知育成）研修」と呼ばれており、共通テーマとして、「多面的・総合的評価とｅポートフォリオの活用で高校・入試・大学・社会をつなぐ資質・能力を育む～対話・協働を通した学び（気づきや振り返り）を生かした『メタ認知能力』を育む授業・行事への転換～」を掲げている。「e-Portfolioワーキンググループ」（＝「WG」）が立ち上がっており、委員に選任

された教員７名は、「生徒の主体性ややる気を育むために、ルーブリック評価を授業や行事で実践し、e-Portfolio（学びの地図）に落とし込む。この仕掛けと仕組みを整える」作業に従事している。校務分掌として、「多面的評価・ｅポートフォリオ開発担当」（＝「担当」）教員２名を配置している（臨機の増員あり）。大正大学との共同研究が進行中であり、７月28日に、同大学巣鴨校舎礼拝堂で開催された第４回高大接続システム改革フォーラム「どうなる？どうする？ｅポートフォリオ－学びと成長を可視化し、高校から大学へつなぐために－」（主催：大正大学、後援：文部科学省、東京都教育委員会）内のシンポジウム「ｅポートフォリオは高大の教育をどのようにつなぐのか」では、「担当」教員のうちの１名が登壇して、「『高校現場』からの報告」を行っている。関西学院大学やベネッセとの連携事業も計画されている。また生徒に対しては、夏期講習会期間中の７月20日と21日に、入力講座と登録指導を行っている[(8)]。

Ⅲ．JePを活用した評価の手順

１．10月20日と21日に開催された宝仙祭において、同学園高等学校女子部の１年生は、お化け屋敷＆スライム「ふあふあコーンの家」、身体表現「喜怒哀楽」、ミュージカル「アラジンと魔法のランプ」、２年生はミュージカル「夢から醒めた夢」の活動を行っている（これらは、あくまでも例示であり、加えて模擬店や保育ルーム、リズムダンス、バトン部発表など、複数の別の企画が催されている）。そこでのパフォーマンスや学びについて、生徒が個々に自己評価する（自分との対話）ためのシートや表が、活動ごとに、紙ベースで、「担当」教員によって作成されており、まず生徒は、もちろん事後において、選択・自由回答や採点をする。

○　第１学年　お化け屋敷＆スライム「ふあふあコーンの家」

総合評価シート ・　グループ名

・　発表内容

以下の項目について、それぞれ次の４段階で評価しよう。

Ａ：大変素晴らしい　Ｂ：おおむね満足　Ｃ：もう少し

Ｄ：改善が必要

（発表内容）

・　適切なテーマを設定できていたか　Ａ　Ｂ　Ｃ　Ｄ

・　計画を立てて実施することができたか

Ａ　Ｂ　Ｃ　Ｄ

・　仲間と協力して（柔軟な）作業ができたか

Ａ　Ｂ　Ｃ　Ｄ

・　（テーマを生かした）展示内容に満足できたか

Ａ　Ｂ　Ｃ　Ｄ

（総合評価）（４段階評価）　Ａ　Ｂ　Ｃ　Ｄ

（コメント）

自己評価シート

・　氏名

・　テーマ設定の理由

以下の項目について、それぞれ次の４段階で評価しよう。

Ａ：大変素晴らしい　Ｂ：おおむね満足　Ｃ：もう少し

Ｄ：改善が必要

（テーマ）

・　テーマ設定に積極的にかかわれたか　Ａ　Ｂ　Ｃ　Ｄ

（計画・準備）

・　無理のない計画を立てることができたか

Ａ　Ｂ　Ｃ　Ｄ

・　計画の変更などに柔軟に対応できたか

Ａ　Ｂ　Ｃ　Ｄ

・　余裕を持った展示準備ができたか　　A　B　C　D

（共同作業）

・　お互いに意見を交わしながら作業をすることができたか　　A　B　C　D

・　お互いの創意工夫を生かした展示内容にすることができたか　　A　B　C　D

・　（当日）本番は問題なくスムーズに運営することができたか　　A　B　C　D

（総合評価）

・　展示部門の一つとして有意義なものにできたか　　A　B　C　D

・　展示内容の成果は満足のいくものだったか　　A　B　C　D

・　今後の様々な活動に生かせるような振り返りができたか　　A　B　C　D

（活動を終えてのコメント：感じたこと、思ったことなどを書こう）

○　第１学年　身体表現「喜怒哀楽」

評価項目	大変素晴らしい／４点	おおむね満足／３点	もう少し／２点	改善が必要／１点	得点
演技（動作）の理解（知識・技能）					
ストーリーの理解（知識・思考力）					

パフォーマンス（思考力・判断力・表現力）					
グループ内での発言・役割（主体性）					
練習時の態度（多様性・協働性）					

○　第1・2学年　ミュージカル「アラジンと魔法のランプ」・「夢から醒めた夢」

評価項目	4（80％以上）	3（60％以上）	2（25％以上）	1（25％未満）	得点
主体性 授業の理解・目標（確かな知識・技術）					
多様性 行動力（豊かな人間性）					
協働性 目的に合ったコミュニケーション					
演技力 発表力、創意工夫・独創性					

2．次に生徒は、「活動履歴のまとめ」の用紙を入手し、上掲のシートや表に記した評価結果をベースにして、「宝仙祭（学校行事）」の「振り返り」について、二つの「視点」のそれぞれごとに、指定の欄内に文章で記述する（「目標」の方は、事前に記

入済みである)。これは、「WG」がフォーマットの原案を示し、その委員を含む複数の関係教員が検討を重ね、最終的に全体として合意したもので、一覧表形式になっている。なお正式には、途中省略した二重波線部分に、「総合学習（探究活動)」、「期末テスト（学校行事)」、「オープンキャンパス（探究活動)」、「部活動（部活動)」、「委員会（生徒会・委員会)」、「クラス係（生徒会・委員会)」、「学校以外の活動（その他)」、以上の七つのためのスペースが挿入されている。

活動名	目標	振り返り	
	開始時点でどうありたいか。そのためにどんな行動をするのかを宣言する。	視点１：目標に対してどうだったのかを実際に振り返る(成果・行動・状態)。	視点２：活動を通しての気づき、得たこと、学んだことを言語化する。
移動教室（学校行事）			
体育祭（学校行事）			
宝仙祭（学校行事）			
資格・検定（その他）			
表彰・顕彰（その他）			

３．そして生徒は、早ければ10月中にも、11月に入ってからは徐々に（ただし現実問題、ここまでスムーズなのは、自主性に富む、わずかな者に限られる)、「活動履歴のまとめ」に手書きした内容を踏まえて、スマートフォンやタブレット、PCからJAPAN e-Portfolioにアクセスし、情報科担当教諭のサポートを受けながら、「基本情報」と「学びのデータ」を入力・登録する（そ

の作業が本格化するのは、２学期終了後に行われる冬期講習会時からであり、そのため全員分のデータが揃うのは、３学期途中にまでずれ込むことになる）。このうち後者のページでは、「学びのカテゴリ」、「実施年月日」、「場所」（30文字以内）、「内容・要旨」（200文字以内）、「参加メンバー数」、「自己の役職・役割等」（60文字以内）に続けて、自らの取り組みについての「ふりかえり」（400文字以内）を記入し、必要に応じて、エビデンスとなる文書や画像のファイルやURLといった「資料を添付」する。そして宝仙祭の「ふりかえり」の事例としては、次のものを挙げることができる（すべて11月末までに全文入手済みであるが、転載に当たっては、あえて一部抜粋にとどめた）。

○　第１学年　お化け屋敷＆スライム「ふあふあコーンの家」（３名分）

「年齢に関係なく楽しめる」を創ることができた。一日目の当番がいないなどの課題を改善し、二日目はよくできた。
「お客様を楽しませる」をテーマに実施した。初めての文化祭は、とても楽しかった。非日常感が何とも言えない良い感じでした。
準備期間はうまく意見が出なかったが、準備しているうちに意見が出始め、まとまってきた。

○　第１学年　身体表現「喜怒哀楽」（３名分）

「楽しい」というイメージを強く、どうしたら楽しくできるか、笑顔で踊って見ている人を笑顔でいられるようにした。すごい達成感や一体感が得られて、嬉しかった。
「怒」のテーマでは、曲調と表情で表現できるように、どのように教えたらうまくできるか考えた。
「哀」のテーマやその表現が難しく、思うようにできなかった。「いじめ」を表現できた。

○　第１学年　ミュージカル「アラジンと魔法のランプ」（２名分）

照明や音のタイミングなどアクシデントが色々あったが、楽しかったし、お客さんが拍手してくれて嬉しかった。今回の失敗を来年に生かせるようにしたい。
Ａ組の大道具係、小道具係（衣装）の人たち、Ｂ組の照明や音響の人たちとの連携をもっと前から相談し合えばよかった。初めてのミュージカルにしては、よいものを創ることができた。

○　第２学年　ミュージカル「夢から醒めた夢」（２名分）

友だちや親子、老夫婦の愛やみんなの優しさ、思いやりを持ってみんなで助け合って生きていることを感じた。
誰にでも命があるので、自分で命を投げ出したり、人を殺してしまったりと命を無駄にしないように一日一日を大切に生きていきたい。

Ⅳ．終

これまでの考察によって、次の二点が明らかになった。

（１）　宝仙学園高等学校女子部では、高校教育改革の諸動向、なかでも多面的評価の推進を求める声に応えるべく、生徒の主体性等を評価するための手法として、JAPAN e-Portfolioの導入を決定し、議論や研修・研究を重ねつつ、体制を整備するなど、運用に向けた準備を着々と進めている（2018年４～８月を中心に）。

（２）　同校の生徒は、宝仙祭での活動について、評価シート・表と「活動履歴のまとめ」に記入した上で、特に後者を踏まえてJAPAN e-Portfolioにデータを入力することによって、自らの学びを振り返り、主体性等についての自己評価（メタ認知による学習評価）を行っており、そこから次の学びに、そしてその先の自己学習へ向かっている（同年10～11月にかけて）。

これらの知見を合わせることによって、学習評価の充実をめざした宝仙学園高等学校女子部の取り組みについて、一つの流れを明らかにすることができたものと筆者は考える。

しかし本稿の対象については、特定の学校に絞るのはよいにせよ、それでも最長で、せいぜい８ヵ月程度のスパンの動きだけしかフォローできておらず、学園祭以外の活動を全く取り上げていないなど、いささか時間的に短く、サンプル数が少ないとの印象が否めない。宝仙学園高等学校女子部では、JAPAN e-Portfolio上での振り返りを経て、生徒にどのような変化が見られたのか、入力内容を教師がどのように受けとめたのか。これらの点もまた、不分明なままである。今後の課題としたい。

さらにJAPAN e-Portfolioそのものに対しては、期待の一方で、様々な懸念が表明されている。例えば「教員が扱う校務支援システムと連動しておらず、生徒が入力した記録を教員のシステムに移して調査書にする際、情報漏洩や転記ミスをするなどのリスクが避けられない」(9) という指摘がある。仮にこの通りであるならば、構造上の不備や欠陥は、しっかりと克服されなければならないだろう。その上でJAPAN e-Portfolioが、高校教育と大学入試のあり方に対して、どのようなインパクトを与え、どれほどの変革を迫るのか。大小両方の視点から、事の成り行きを注視したい。

執筆分担

ⅠとⅣは助川、ⅡとⅢは坂本が担当した。彫琢作業の大抵は共同で行った。ただし最終的な文責は助川にある。なお坂本の職務上の立場については、本誌所収の二つの別稿で述べた通りであるため、もう繰り返さない。

注

（１）香川大学教育学部附属高松小学校　『活用する力を育むパフォーマンス評価～パフォーマンス課題とルーブリックを生かした単元モデル～』　明治図書　2010年

（２）北原琢也編著　『「特色ある学校づくり」とカリキュラ

ム・マネジメント　京都市立衣笠中学校の教育改革』　三学出版　2006年
（３）文部科学省教育課程課・幼児教育課編　『別冊初等教育資料』２月号臨時増刊（通巻950号）　東洋館出版社　2017年２月　p.75.
（４）同上　pp.109-110.
（５）http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/07/__icsFiles/afieldfile/2017/07/14/1388089_003_1.pdf（accessed 24 August 2018）
（６）http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/04/24/1384661_6_1.pdf（accessed 24 August 2018）
（７）https://jep.jp/EPortfolio/statics/about.html（accessed 30 August 2018）
（８）　２学期に入ってから宝仙祭当日を迎えるまでの間にも、副部長会（９月５日、12日、19日、10月３日の第９～12回）や職員会議（９月10日、10月15日の第８、９回）をはじめとする各種会議・組織において、議論や作業が継続されているが、骨格となる部分は、８月31日までで確定している。
（９）「学業・部活…生徒がスマホで記録　埼玉版ｅポートフォリオ／県教育局、公立高校で実証実験へ」　2018年９月４日付朝日新聞